KOSUGI+ANDO 遷移状態

櫻井篤史　(FBより)

KOSUGI+ANDO作品にはいつも感心させられてしまうのですが、今回も相当立ちすくみました。前回との連作との事なので、神戸展示を見られなかった私としては、しっかり向き合えたのか分かりません。ただ、言い知れない不在感と不安感は、「福島」のプレートや風景を別のものに差し替えたとしても成立する強靭な普遍性から立ちのぼっているのだ、と確信しました。(あくまで独断ですからね。)
時限回転装置に載せられたふたつの投影装置、そしてVTR。これらが映し出す風景は、動画のビデオ映像ですら(その中に例えばトラック等の動く物が写り込んでいようとも)、完全に無人であり空疎であり続けます。そしてこれらの配置の中に身を置く不安。まるで誰もいなくなった街に取り残されたような焦燥さえ感じられるのですが、(作品の中を歩き回り、自分の影が映像を遮った時に特に強く感じます。)
機械たちだけは淡々と、ひたすらに、様々な回転音を発しながらオートマチックに動き続けるのです。
この展覧のただ中に佇んで、放射線被爆への不安と苛立ちを感じる事は難しく有りませんが、この作品は、もっともっと普遍的な、人間と人間以外の全てのものとの関係性について黙考させられる「場」としての凄みがあると思います。

2011/10/18